
将校少女と机上のジョーカー

とまと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

将校少女と机上のジョーカー

【NNコード】

N4358Z

【作者名】

とまと

【あらすじ】

裏表のある性格の主人公が狡賢い少女と共に変化を遂げていく? はずの展開不明、学園頭脳戦ゲームコメディを目指しています。初心者なので取り合えず一ヶ月ほど頑張ってみようと思います。色々と不備があるとは思いますが、どうか暖かい目で読んでやって下さい。

プロローグ

世の中には二種類の人間がいる、とよくいわれるが、実際のところは違う。

世の中には何千もの種類の人間がいる。

生まれた時から地位や才能に恵まれたものとそうでない者・土壤場で奮い立つものと怖じ氣づく者・どんな時でも前向きに考えられるものと後ろ向きな考えを抱いてしまう者。

容姿や知能や運動神経を含めればもつとだろう。人間はそれぞれ色々な長所と短所をもつていて、それによって人生が左右されることがある。

学園生活ともなれば尚更だ。一つの建物の一つの部屋の中で40人弱の人間と最低でも一年間、一日の半を共に過ごすのだから。その人の人間性やステータスなどが他者に簡単に把握されてしまう。それから友達。

自分と気の合う仲間と過ごす、というがその人間たちで構成された小グループは、実は幾つかのパターンに分けることができる。クラスの中でもいい意味で目立つタイプの人間達はそこで集まる事が多い。たまにそんな2つのグループの間で衝突することもあるが。このグループは学園内で一番希少価値の高い存在だ。

次にいつも孤立している、または行動そのものが他人に不快感を与えてしまう人間達。

彼らも慰め合うかのように密集する。たまに同性愛者達が集まつてるように見えてしまうこともあるが。

彼らが目立つのは行事の係決めのとき。目立つグループたちに色

々とからかわれて輝くことが多いある。

そして極普通のグループ。学園内では一番多い筈だ。特にもてはやされるわけでもなく、パシリとして使われることも悪目立ちすることもなく、グループ内で盛り上がるだけの一般的な集団。不良集団もこれに含まれる。

例を挙げるとしたらこれくらいじゃないだろうか。

ここ、私立清藍学園も例外でない。個性豊かな生徒達が自分に合ったグループの中で学園生活を謳歌していた。ただ一人を除けば。

その例外——市川 優太は決まったグループに所属していかつた。一匹狼というわけではない。仲間外れというわけでもない。優太はむしろ友達が多かつた。

同じクラスのグループであれば何処にいっても快くに受け入れてもらえた。喧嘩をすることもなく、誰かに嫌われることもなく、常人よりも良好な人間関係を築き上げていた。

他人からの評価は『優しい』の一点張り。それより評価が上がることも下がることもなかつた。

成績は中の下、運動神経は中の上、容姿は普通。全てが極普通の少年だった。表向きだけは……

優太は平凡な学園生活に不満を抱いていた。何のハプニングもなく、これといって目立つこともない。日々、平凡至極な毎日にウンザリしていた。

彼は自分が嫌いだった。努力をしても一番になれない、得意なことがあっても他人に必ず追い抜かれてしまう。そんな自分が大嫌いだった。

自己嫌悪だけなら普通だ。だが優太はそれに加えて自分の本心を隠していた。

他人に本当の自分を知られたくないから。自分の歪んだ考え方を見せたくなかつたから。

彼は嘘で自分を塗り固めて、仮の性格を作り上げた。

そんな彼に転機が訪れたのはある年の12月10日のことだつた。

よつ、読者様方。市川 優太 だ。

いきなりで悪いんだけど、この話しさは俺から見た世界を描いてる。物語も俺中心だ。つまりは、一人称つてわけだな。プロローグは三人称だったんだが、ここからは俺が担当するらしい。

わかりづれえ、つて思うかもしれないが慣れてくれ。すまんな。

閑話休題

「市川つてホント彼女できないよなあ。こんなに優しいのに」1年B組のクラス内で海原 航は俺に向かつてそう言った。

「あのなあ航、女子が優しいだけの男子に心を奪われるわけないだろ」

からな

「そうかなあ？」

航、優しさはたまに人を傷つけるんだ。お前にはわからないだろうが。

海原 航、俺と同じ水泳部に所属してる最強人間だ。

成績はいつも学年トップだ。顔も白人みたいな感じで華がある。しかも地毛の色が茶色。

そのクセして純日本人つていうんだから凄いよ。

それからとにかく筋肉がヤバい。一日に一遍、自主的に筋トレをやつてるらしい。

おかげでクラス一の力持ちでもある。
欠点があるとすれば球技がダメなことと女たらしなどくらい
だな。

そんな奴と俺がなんで一緒に普通に話してるかって？

理由に簡単 同じ部活だから

子れ以外いかぬ事、如何の持合がんぞ、さにモナヒテ

「市川さあ、好きな人とかいないわけ？」

今にしたしかな
正直恋愛にあんま興味なしし

ないぞ。

「とか言って三ヶ月まえに佐野に告つて振られたクセに」「なつーー、うつせえ。近くにアイツいるのにデカイこえでその」と喋るなよ

そうしたら航が近くに座つてた佐野本人に向かつて『なあ、お前

航に向かつて裏拳をお見舞いしようとするが、手で軽く受け止められ、足払いを掛けられて床に倒れ、そしてお返しとばかりに四の字固めをつて

力アキラ 僕は別に起きて怒ってないから

れる折れる折れる！！」

俺は必死にタップするが、航はそんなお構い無しなご様子で、どんどん手加減がなくなつていつてます。佐野に視線を送つても、『

程々にね』と言いながら苦笑するだけ。

佐野、あんたこれをお友達同士のじゃれあいと勘違いしてんだろ。『Jリチャは肉体的に限界が来そつだつてのこ。

そんなところに誰かが割り込んで、航を難なく俺から剥き剥がした。

「矢野お、マジで助かった」

「おい矢野、空氣読めねえな」

「いやー悪い悪い、手が滑つてな」

今、俺を死の淵から救い上げてくれた男は 矢野 やの 岳 たけ 同じ水泳部員であり、高1にして、将来はオリンピックにでれるのでは? と噂される水泳部の若きエース。俺の裏面を知る唯一の友達もある。

「海原、一体何があつて『Jリ』に四の字固めをお見舞いしてたんだ?」

「まあノリでかな。その場の空氣つてやつ? 周囲のやつらが、『市川に四の字固めしる』って空氣を作つてたから」「なにその空氣! ? なんて限定的なんだ! !」「ツシコミ! ? が違う気がする」

ん? 他に突つ込むところなんてあつたか?

「Jリいつ喜んでたし、ドMだからいいだろ」

「ああ、そういうやうだつたな」

「お前等、俺をどんな目で見てるんだ?」

「変態だ! !」

先に言つておく。俺は断じて変態ではない! ! これからなんと言われようが気にするな。

そんな感じで俺等がバカをやつてると、教室に男子達がやつてき

た。

「おい、航。バスケやるって言つてから何分経つてんだよ」

「早くしないと昼休み終わるだろ」「

校内でも人気の高い男子達がやつてきたことで、クラス中の人がそこに注目してる。

一部の女子なんかは頬を赤らめてやがる。

ホント、人気者って凄いよな。

航は自分もその中に含まれてることを知らないらしく、『人気者は大変だな』なんて言つて笑つてる。

「そういうやすっかり忘れてたわ。今いくよ

「早くしろよなあ」

「うい。了解

あつ、行くんだ。球技苦手なのに。

航がバスケに参加することがわかると、男子達は教室を出て行つちました。

忙しそうで羨ましいな。全く、俺は万年暇人だつてのこ。

「あつ、そういうやお前達もバスケやる?」

「いいや、俺達は遠慮しとくよ。足手まといになるのは御免だしな」

「ん? そりかあ? まあ、ムリにとは言わねえけどさ」「

そういうと航は教室を後にした。

すまんな、航。お前の優しさには感謝してるよ。ホントに。

「おーい海原あーー！」

廊下に向けて大声で叫んだ。

「あん?」

「わーー! まさかホントに戻つてくるとは。予想外だつたぜ。

「なんだよ? 用事でもあんのか?」「

「いやつ、その、あれだ

「なんだよ。ハツキリしないな」

「ありがとう」

「ハッ？ それだけ？」

一
お、お、お、

「お前に言わると笑しか込み上にいるわ キモチ」「川イ」
そう言い残して航は再び俺の前から去つていった。

「んで市川さん

「ん? どうした田中ちゃん

「なんて俺の分までバカにするの断ったのさ」

「俺が一人になると寂しいから、

俺が一人になると寂しきから

「そ、うか、と、りあえず死ねー

「いいじゃん別に。そこまで強くないんだし」

お前はただの黒魔力だぞ

「アーリー・デベリ

「そんなにバヌケが大切か ケヌ」

とおえす夕ね

「なあ田よ。言葉のエッジボールが成立してないよ」

「おそれく成立してゐる。お互に暴言を吐いていひ喧嘩のア

ツジボール

「つーかそれ以前にさあ。本当は言葉のキャッチボールなんです

けど。超ウケるわあ、このおっさん顔

「市川、覚悟はいいか?」

岳がその言葉を言い終える前に、俺は廊下に飛び出していた。

さあて、本日一度目の処刑タイムだ。

「待てよ、市川。時間掛かるだろ」

「そう怒らないで。た・け・る く・ん」

「市川あ！」

俺は全力で廊下を走りだした。

これが俺の日常。人の揚げ足とつたりしながら毎日を無理やり充実させてる安い日常。

俺はこんな学園生活なんて望んでない。いつ何時でも勝手に面白いことが舞い込んでくるような、そんな忙しい毎日を俺は送りたい。一生思いでに残るような、最高に忙しい学園生活を。

それに必要不可欠なのがパートナーだ。素顔を見ても俺のことを受け入れてくれるくらい心が広くて、どんなときでもハッピーナンゲ満載な素敵なパートナーが。

第一話（後書き）

宜しければ感想等をお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4358z/>

将校少女と机上のジョーカー

2011年12月19日16時47分発行